

のび太の艦隊これく
しょん

スーパーザウルス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある理由から提督となった野比のび太（27歳）が新たな相棒『叢雲』を筆頭に愉快な仲間達と共に艦隊運営をしながら、これまたとある理由で壊れてしまった『ひみつ道具』をマッドサイエンティストの『明石』、『夕張』に修理させて毎回騒動を起こすタバタコメデイ。

▼今作は『艦隊これくしょん』と大人になった『ドラえもん』のキャラクター達が出てくるクロスオーバー作品です。

▼基本的には1話完結（長いと感じたら前編後編に分けて）の短編集を目指して行うかと思えます。たまに大長編もやろうと思えます。

- ▼所属艦娘に縛りとかはないのでなるべく全員出したいです。
- ▼キャラ崩壊はなるべく酷くしない様に心掛けますがご容赦ください。
- ▼ひみつ道具は原作と若干異なったり、劣化してる設定です。

目次

コンピュータータペンシル	1
とりよせバッグ①	16
とりよせバッグ②	25
ビッグライト①	40
ビッグライト②	49
ビッグライト③	64
わすれろ草	80

コンピュータペンシル

くコンピュータペンシルく

内蔵されたコンピュータによって問題の正しい解答をスラスラスイスイと自動的に記入してくれる鉛筆。学業だけではなく、仕事などにも使える。

あの頃から17年が経った。

『時間』——それは森羅万象の全てに当てはまるもの。

かつてその巨体で大地を揺るがし地上を支配した恐竜は数億年で絶滅し、人類が誕生してから数百万年で地球環境を激変させたように、過去から未来へ時の流れに伴って多種多様なものが変化を遂げた。

かつて『彼』がいたこの部屋も未来ではこの家を取り壊され全く別のものにならわって

しまっている。

漫画や祖母に読んでもらった絵本が乱立された本棚、引き出しを開けば時空間と繋がっている勉強机、そして、彼が寢床にしていた押入れ。

『彼』がいなくなってから17年前、この部屋もいつかは——

だが、どんなに時が経とうと変わらないものだってある。野比のび太と『彼』との絆は17年経とうと100年経とうと変わらない。

今もこの押入れを開ければ彼がそこにいるような気がして——

『……………のび太君……………』

微かに聞こえてくるか細い声。込み上げてくる涙を引つ込め、のび太は冷静になろうとする。

彼は17年前からいない、帰ってこれるはずがない。——これは夢だ

『のび太君』

次第にはつきりと聞こえてくる声、だが反比例するようにのび太は意識を眠りのさらに深い所まで沈めようとする。

夢の中でくらいもう少し『彼』の声を聞いていたい……

が、しかしそんな儚い願いをのび太の今の相棒は無慈悲にも打ち壊す。

「のび太あああああ!!!!!!」

「は、はいいいいいいいい!!!!!!」

かつての小学校教師や自分の母親の顔が脳裏を掠めながらいきなりの怒声に思わず椅子からすつ転ぶのび太。外れかけた眼鏡を整え横を見上げると、腕組みをし顛顛に血管を浮かびあげながらこちらを見下ろす少女がいることに気付く。

なびく長い銀髪、ボデイラインを強調するような服にピンク色のネクタイを締め、どういう原理で浮いているのか分からない耳のような艷装がトレードマークの吹雪型5番艦——駆逐艦『叢雲』である

「お・は・よ・う」

「おはようございます、叢雲さん……」

本来なら仮にも上司である彼を呼び捨てにしようものなら嚴重注意するところだが、全面的に自分が悪いことを自覚してるのですぐさま正座に移行する。

「部下に仕事を押し付けてる間にうたた寝とは、ほんといい身分よね、司令官」

「ち、違うんだよ叢雲！ 仕事しようとしたけど夕立や時津風が来て一緒に遊ばないと判子を隠そうとするし、金剛がこの前MVP取ったご褒美にお茶会に付き合えつて言うもんだから——」

「へえ、私が一人で司令官の仕事を片付けている間にあなたは他の艦娘達と戯れていて……」

「あつ、い、いやそういうことは……」

どんなに時が経とうと変わらないものもある。

野比のび太27歳は提督の座についても相変わらずドジでグズで気配りが出来ない甲斐性無しであった。

「そんなに艦娘と親しいならこの『艦娘レポート』もあんた一人で大丈夫そうね」

目が笑っていない笑顔で用紙を叩きつける。それは三ヶ月毎に大本営に提出を義務付けられてる、艦娘に関する報告書であった。

艦娘が発見されてから17年、まだまだ謎多き彼女達を観察しその秘密に迫るのも提督の重大な役割である。故に簡易的なものとは言えそのレポートは所属する艦娘の数だけ各々の鎮守府は提出を強いられる。

「そ、そんな!?! まだあと100人分も残ってるのに、僕一人でなんて!」

「提出期限を1ヶ月も伸ばしてもらったのに今日まで手をつけなかったあんたの責任よ。期日の明日のマルキュウマルマルまで死に物狂いでやりなさい」

「今ヒトナナルマルだから……あと16時間?!」

16時間で100枚のレポートを書くのは単純計算で1枚約10分で書き終えなけ

ればならないということだ。集中力の高い人間なら出来なくもなさそうな量だが、残念ながらのび太に16時間ぶつ通しでこんな作業をする集中力は無い。

「無理無理！ 無理だつて〜！ 絶対間に合うわけない！ 大淀にまた怒られるよ〜！」

自分の母親を彷彿とさせるような激昂した時の大淀はのび太にとって軽くトラウマになつていた。

「それじゃ、私は夕食の用意があるから」

「ま、待って！ 叢雲——ブツ!!」

頼みの綱に縋りつこうとするも閉められた執務室のドアに顔をぶつけ、あまりの痛みで蹲る。もう一度言うがこの男がこの鎮守府の提督である。

「はあく、僕はどうしていつもこうなんだ……」

鼻から伝ってくる熱い痛みはドアにぶつかった衝撃によるものか、自分の不甲斐なさから湧き出る悔しきや腹立たしきによるものか。自分はその時から、『彼』がいなくなつてから前に進めているのだろうか、そんな不安が次第に押し寄せると同時に『彼』の顔が頭の中に浮かんでくる。

「今の僕を見たら『彼』は何て——」

「お困りのようね！ そんな提督にびつたりの——そんなところでコロコロ転がつて何

してるんですか？」

勢いよくドアを開け颯爽と現れたのはポニーテールの髪・スカート・頭の大きなリボンが緑、胸リボンがオレンジという特徴からメロンの愛称で親しまれる少女——軽巡洋艦『夕張』

そして彼女が見下ろしてる、おもいつきり開かれたドアに鼻をぶつけのたうち回つてこの情けない眼鏡は鎮守府の提督、野比のび太だ。

「夕張……ドアを開ける前にノックはしようね。それと僕今忙しいんだけど」

「あーはいはい、嘆かわしいやり取りは全部廊下まで聞こえてたから今更取り繕わなくていいの。それより提督、今まさに御誂え向きの物がありますよ」

「そ、それは！」

夕張が懐から取り出したそれは、小・中学生が使用する文房具の1つ『鉛筆』の形状をしていたが、一般的なものには無いであろう6つの小粒の豆電球のようなものが鉛筆の削られてない側に取り付けられている変わった代物だった。

「コンピューターペンシル〜」テツテレー

「ついに完成したんだね！ ああ、子供の頃これを手にするのをどれだけ望んだことか」

「ま、天才メカニックの私にかかればこの程度の修理なんて朝飯前ね」

「いやあ、持つべきものは優秀な部下だなあ」

「じゃあさっそく使ってみて下さいよ」

机に座り鉛筆を握った途端、のび太の右腕はまるで別の生き物になったかと錯覚させるほど彼の意思を無視して書面の上を踊るように執筆していった。

「おお、握ってるだけなのにまるで誰かに右手だけ操られてるみたいだ」

「ふうん、にしても提督結構字が綺麗ですね」

「いや、僕じゃなくてコンピューターペンシルが全部やってるんだよ。しかし物凄い速さだ、もう一枚書き終えちゃったよ」

二人が喋っている間ものび太の右手が握っているコンピューターペンシルは淡々と作業を続け、わずか3分で白紙だった用紙に達筆な文書を書き上げ、新しい用紙を出せばすぐさま次の作業に取り掛かった。

「でも、私達のことについてまとめる書類を道具任せっていうのは提督としてはどうなんでしょうかね」

「ええ………これを渡してきた張本人の君がそれ言う？」

「私はデータが欲しかったのと選択肢を与えただけですから」

「うぐつ………次は、次はちゃんと自分でやるから！」

「提督………良い奥さん見つかるといいですね」

「やめて！ 暖かい眼差しでそんなこと言わないで！」

「まあデータも取れたことだし、私は軽巡察に戻りますね」

夕張が執務室から出て行った後は右手で執筆をして終わったら筆は一時停止したのを合図に左手が用紙を変えるベルトコンベア作業が続いた。

山積みだった書類がそろそろ半分になる頃、ほとんど意識を向けなくても良かったのでふと窓を覗く。藍色と紅が入り混じっていた空模様は濃い闇に染まり、月明かりに照らされた海は海岸から水平線まで光の道を紡いでいた。

「良い奥さんかあ……」

夕張の言葉を思い出しながら意中の相手のことを浮かべる。

お下げの髪をした彼女は今どうしてるだろうか。こんなにも未来が変わってしまった今、自分と彼女が結ばれる日など来るのだろうか。

「はあ……しずかちゃん——」

「司令官、入るわよ」コンコン

「とおわつ@☆かamS#メも!!???!?!」

「なに変な声出してるのよ……!!?!?!」

ドアを開けて入って来た秘書官叢雲の思わぬ登場に初対面なら軽く引かれ兼ねない奇声を上げてしまう。独り言もそうなのだがコンピューターペンシルの存在に気付かれないかという懸念が脳裏を過る。しかし同時にのび太は叢雲が持ってきた物に気付

く。

「な、なんだ叢雲かあ。見ての通りちゃんと仕事はやってるから……って、その手に持つてる皿は……」

「自分のツケでお忙しい司令官様のために晩御飯のカレーを届けに来たのよ、文句ある？」

「……………む、む、むらくもおおおおお……!!!」

「なに泣いてんのよ！ だらしないわね……ここに置いておくからキリのいいところで食べてさっさと仕事を終わらせなさい」

「え、あゝ、うん、その………」

「何？ 奥歯にもものが挟まった言い方ね、言いたいことがあるならばつきり言いなさいよ」

「今どうしても手が離せなくてさあ……食べさせてくれない？」

「はあ!」

勿論比喩ではない。起動したコンピューターペンシルがノルマを終えるまでのび太の右手を完全に固定してしまっているのだ。いや、それに留まらずコンピューターペンシルの支配は体全体にまで広がり文字通り席から離れなかった。

本来の仕様ならこんな拘束はまず無いのだが夕張の技能を持ってしても22世紀の

ひみつ道具の完全修復には至らず、この様な弊害が度々発生するのだ。

「私、最終的には司令官のオシメを交換させられるのかしら」

「僕はまだ27だよ！」

「27にもなつて部下に食べさせて貰う様な情けない提督は世界中探してもあんたぐらいでしょうね」

「うぐつ……………」

「はああああ……………つたく、仕方ないわね」

「む、叢雲お！ 普段はツンツンしてもデレを忘れない叢雲のそういうところが僕は好きだよ」

「目玉に直接ぶち込んでやろうか？」

「すいませんでした……………」

「調子に乗るんじゃないわよ。ほら、あーん——」

側から見れば提督と秘書官の仲睦まじい、見方によっては色恋沙汰にも捉えられる場面。無論叢雲はそんな風に見られるのが嫌なのでこんなところは誰にも見られたくない。特に彼女の長姉は煩わしいほどに突っ込んでくるので尚更だ。

しかし女神は彼女に微笑んでくれなかつたのだろうか。タイミングが悪いとはまさにこの事である。

「司令官、晩御飯持つてきましたよ。サボらずちゃんとやっていますか……つて」ガチャ

「……………」

カレーを持つて執務室に入つて来た二人目の配給者は叢雲に愚姉と評される吹雪型一番艦——駆逐艦『吹雪』

突然の来訪者に凍りついたかの如く静止する二人だったが、沈黙を破つたのは叢雲からだった。

「吹雪、勘違いする前に言っておくけどこれは——」

「大丈夫だよ、叢雲ちゃん。お姉ちゃんは全部分かつてるから。初雪ちゃんには叢雲ちゃんが朝帰りするつて伝えておくね。白雪ちゃん!!! 今日御赤飯だよー!!!」ダダダダ

脱兎の如く廊下を駆け抜ける吹雪、と同時にゴゴゴと大量の負のオーラが叢雲から溢れ出る。

「む、叢雲……?」

「ちよつと急用が出来たからあとは自分でお願い」

「え、でも、僕今両手塞がつてるし……」

「自 分 で 食 え」

「はい……………」

修羅と化した彼女を止める者はもはや居らず、鬼の形相で姉を追いかけた。

「吹雪いいいいいい!!! 待てやコラ———!!!」

「グエツ?!?! 痛だだだだ!!! 逆エビ固めは無理! ほんとに無理だからあああああ!!!」

廊下から聞こえてくる悲痛な叫びを尻目に再びのび太の意識は書類の山に戻された。

「とほほ、結局これが終わらない限り夕飯にはあり付けないのか……まあ、大淀のカミナリが落ちないと考えればこのくらいの空腹なんて」

「私がなんでしょろか?」

「おわああああつ?!?! お、大淀!」

音も立てずドアを開けいつものまにか執務室に入ってきていたのは、時には連合艦隊旗艦として、時には提督のサポートをする任務娘としての顔を持つ大淀型一番艦——軽巡洋艦『大淀』

「先程から廊下が騒がしいから何事かと思つて来てみれば、また提督が奇天烈な道具を使つて騒動を起こしてたんですか?」

「ち、違ふよ! 僕はこの通り、ほら! 艦娘レポートを作成してるところなんだよ!」

「1ヶ月も納期を先延ばししてくせに威張らないで下さい。誰が大本営に頭を下げて

「と思ってます?」

「いつもごめいわくをおかけしてもうしわけありません……」

「だいたい今日まで手をつけてなかったんですから、どうせ付け焼き刃の内容で………な、なんですかこれは!? 達筆な文章でぎっしり書き込まれてるじゃないですか!」

「あーははは、まあ僕が本気を出せばこんなの夕飯前かなあ……」

「もお、だったら最初から本気出して下さいよ。何々、駆逐艦『潮』は他の特型駆逐艦と比べ一回り豊満な胸部装甲に若干のコンプレックスを抱いてるためフォローと心のケアが必要」

「ほ、ほら、潮ちゃんとか一部の駆逐艦ってそういうの気にしてるじゃない?」

「確かに、そういう悩みを抱えてるけど中々周りに相談できない子もいるって聞きますね。部下の内面的な問題にも気を配れるとは、さすが提督!」

「いやあ、それほどでもないよ」

「えーつと他には……これは村雨さんのですね。駆逐艦『村雨』は改二改装に伴い身体的変化が著しく、胸部装甲がFカップからGカップに増長しているので下着の新調を要されたし………つてまた胸の話ですか……?」

「え!?! いやほら、駆逐艦や軽巡の子つてたまに体が一回り大きくなる子とかいるで

しよ！ ちゃんと各々にあつた服を着ないと戦闘に支障をきたすかなと思つて……」

「なんだか尤もらしいことを言つて言いくるめようとしてる気もしますが……あ、これは峯雲さんのですね。駆逐艦『峯雲』は先月駆逐艦『村雨』と外出して密かにワンカツプ上のブラジャーを購入していたのを確認。これは艦娘が改装とは別に肉体的成長をしていることの裏付けであり……」

読み終える頃には大淀の眉間に皺が寄りレポート用紙の両端がクシャクシャになるほど手に力が入っていた。

夕張の修理したコンピューターペンシルがまともに機能するという保証はない以上検閲を怠るべきではないのだが、のび太はそこで自身の重大なミスに気付いた。

「あ、あの、大淀さん………？」

だが、時すでに遅し

「駆逐艦『朝潮』はここ最近になつて初潮を迎えたが、自身の身に起こつた現象を理解出来ず戦闘中の被弾だと誤認してしまつているため、海防艦や一部の駆逐艦には性教育を施し、ナプキンかタンポンの着用を促す必要がある。尚、私は個人としてタンポンの方が喜ばしい……ですつて!!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

もはやグシャグシャになつたレポート用紙の束は投げ捨てられ、鬼の形相となつた大

淀が握り拳を作りながらのび太に近づいて来た。

「ま、待って！ これは全部コンピュータペンシルが書いたことで!!」

「サボってんじゃねえか!!」(正拳突き)

「ごめんなさい!! ブベラッ!!!」

結局艦娘レポートは一から作り直すことになった。

尚、翌朝某重巡の制作している青葉新聞には『ストーカー疑惑!! 艦娘の性事情を事細かに調べる変態提督!!』という見出しが掲載されていた。

とりよせバッグ①

くとりよせバッグ

取り寄せたい物の名前を声に出しながらこのバッグに手を入れると、それがあつた場所に空間があつて手が届く。

「ぽiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!」

陽気な天候が続く穏やかな春、執務室を駆け回る金髪のロングヘアーに左右にケモ耳のような逆毛をした紅い瞳の少女——白露型駆逐艦4番艦の夕立は機嫌が悪かった。理由は明白、

「遊ぶつぽiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!」

提督さんが遊んでくれないからだ。

戦場では狂犬と敵味方から畏れられる彼女も提督の前では遊び盛りの少女と化しその姿はもはや駄犬である。普段ならまだ（ある程度は）待てができるのだが、今回は事前に遊ぶ約束をしていたにもかかわらずのび太がドタキャンしたのだ。もちろんのび

太も夕立と遊ぶのを避けてるわけではない。

「だから言ってるでしょ、夕立。明日までにネ級改の資料を作成して大本営に提出しなくちやいけなくなつたんだ……」

艦娘の観察、検査、運用は提督業の基本的な一環であるが、それと同時に年々勢力が増しつつある深海棲艦の調査も提督の重要な務めである。

先の大規模作戦では多方面の海域において既存の敵重巡洋艦ネ級の上位個体と思われる『ネ級改』の存在が複数確認された。

鬼・姫級に属さない重巡でありながら、その戦闘能力はル級やタ級などの戦艦を遥かに凌駕し、鬼・姫級にも遅れを取らない。

それを脅威とみなした大本営は交戦の多かったのび太の鎮守府に至急ネ級改の詳細な情報を提供するよう促したのだ。

「そんなの叢雲や大淀さんにやらせればいいっばい！」

「一応僕はここの最高責任者なんだから部下に丸投げは出来ないよ」

「うう……夕立の約束の方が先だったのにく……」

「だからごめんて、また今度ね……」

「提督さんの嘘つき！ 眼鏡！ 童貞！」

「眼鏡は悪口じゃありません、童貞は関係ありません」

「こうなったら、えいっ!」

「あ! こら! 眼鏡を返しなさい!」

「これは人質っばい! 提督さんが遊んでくれないならこの眼鏡は一生返ってこないっばい! 欲しければ捕まえてみるっばおおい!」

「きゃっ!?!」

夕立が執務室の扉を勢いよく開け逃げ出そうとすると丁度すれ違いざまに叢雲とぶつかりそうになった。

「あ、叢雲、ごめんっばい。でも今の夕立は誰にも止められないっばい!」
「!!!!!!」
ダダダ

「夕立待ちなさい! ったくもう……」

「なにやってんのよ、あんた達……また機嫌損ねて眼鏡盗られたのね」

「まあね、大規模作戦が終わったら遊んであげる約束してたのにドタキャンした僕も悪いけどさ」

「はあ……とりあえずこれでも飲んで一息ついたら?」

そう言つて叢雲は部屋に入る前から手に持ってたプラスチック製の容器に入った飲み物を渡す。

「ああ、ありがと——ブフォッ!? 何これドブみたいな味がするんだけど!?!」

「あく、やつぱり不味かったのね。磯風の作ったほうじ茶ラテ」

「そんなもの渡さないでよ!!」

「磯風が作り過ぎて浦風達が困ってたから貰ってきたのよ」

「じゃあ自分で飲めばいいじゃないか……」

「それよりほら、差し入れ貰って一息ついたんだからさっさと眼鏡取り返して仕事に戻りなさいよ」

「ええ……なにこの理不尽な扱い。第一インテリ系の僕が足の速さで夕立に追いつけるはずがないじゃないか」

「何がインテリよ、万年ドベ。仕事しないなら厨房にまだ残ってる磯風ラテを全部飲ませるわよ?」

「ひいいいい!!! それはさすがに命に関わる……で、でもどうやって捕まえればいいのや」

「今日もお困りのようね、提督」

「その声は!!」

「うわ、出た……」

執務室の扉を開け、キメ顔で現れたのはメカニックメロンこと夕張である。

「まーた勝手に資材使って変な玩具作ってきたの?」

「勝手じゃないですう、ちゃんと提督に許可とつてますう。それに今度のはすごいんだから」

「そのバッグはもしかして……?!?」

「とりよせバッグ」テツテレー

「いつも思うけどそのダミ声は何なの……?」

「このバッグに手を入れると欲しい物のところまでの空間をショートカットして伸びた手でそれを引きずり出すことが出来るのよ」

「え? 空間をショートカット……? は……?」

「まあ百聞は一見に如かずだから、僕が実践してみるよ」

夕張の説明を聞いてもイマイチピンと来なかった叢雲のためにのび太が実際にバッグに手を入れてみる。するとそのび太と2メートルくらいの距離があつた叢雲の目の前にいきなり『手』が出現した。

「はあ?! ちよつ、手がいきなり!」

「大丈夫よ、それは提督の『手』だから。空間を無視して叢雲ちゃんの前に現れたの」

「いや、そんな超常現象的なこと説明されても理解が追いつかないわよ!」

「でも、目の前に起きることは間違いなく現実だよ。僕の手がバッグを通して叢雲の前に現れた。もちろん僕の手だから僕の意味で動かすこともできるよ」

のび太の手は宙を舞いながら移動して、叢雲の電探を触り、髪をなで、ほっぺをつつき、胸を――

「フーン！」ガシツ

「いたたたたたた!!!!!
ああ!!!」

「ご、ごめんなさいいいいい!!!!!

ちよつと調子に乗りましたああああ

説明を受けても理解が追いつかないので、とりあえず叢雲は目の前で起きてる事実を受け止めそういうものなのだと言を切り替えることにした。

そして胸を触ろうとした『手』を引っ捕まえ、その指を曲げてはいけない方向に徐々に力を加えていった。

すると鎮守府の長たる目の前の男は情けない声を上げながら床にひれ伏していくではないか。

「なるほど、痛覚もそのまま通ってるわけね」ギチチチ

「折れる!! ほんと折れる!! もう2度としません!! ごべんなさい!!!」

「よろしい」

「いたたた……た、確かにとりよせバッグを忠実に再現できてるね。でも夕張、取り返したい眼鏡を持つてる夕立は移動してるんだよ? とりよせバッグは動くものを掴むことは出来ないはずだけど」

「フフーン、私がただ修理しただけなんてちやちなメカニックに見えます？ もちろん追尾機能も付けておきましたよ」

「おお！　なんて万能なメロン！」

「ならさつきと夕立取っ捕まえて仕事に戻りなさいよ」

「はいはい、それじゃあとりよせバッグの力を存分に使わせて貰おうかな」

再びバッグに手を突っ込み頭に夕立が持つてる眼鏡を念じる。

「ぽいぽいぽいぽいぽいぽい！！！」

すると遠くから夕立の悲鳴が聞こえてきた。目の前にいきなり手が出現すれば誰だって驚くだろう。

「さあて夕立、観念しろよく。そこだ！　あれ？　違う……ここか！　んんんんか違うものを掴んだかな？　これが！　いや、これでもない」

「なに遊んでんのよ……さつきと捕まえなさいな」

「そうは言っても、夕立が結構抵抗するから……！　こら！　大人しくしなさい！」

バッグ手をつ突っ込みながら激しく格闘してる大の大人という構図はなんともマヌケなものであった。

「うわつ、冷たっ!?　何かかけてきた!?」「こんの……いい加減につ、しなさい!」「よし！　顔を掴んだ!」「眼鏡、眼鏡はつ、あつ！　あつた！　これだ!」ズイ

一人相撲の末バッグから引つ張りあげると、その手は確かにのび太の眼鏡を掴んでいた……ずぶ濡れになった状態で。

「ようやくですね……つて臭い! 提督、手からドブみたいな臭いがしますよ!」

「クツサ!? これって磯風ラテの臭いじゃ……!?」

「な、何はともあれ眼鏡も戻ってきたし、これで執務に取り組めるわね……とりあえず臭いから近寄らないで」

「ひどい!!」

「一先ず一件落着……と思った矢先である。執務室に向かって大勢の足音がドタドタと近づいて来た。

「え? なになになに???」

ただならぬ物々しさに何事かとのび太達が扉の方を向くと勢いよくドアが開けられ、

「admiral! 敵襲です!」

「やっぱーい! マスターハンド! マスターハンドが出たよ!」

「提督さん、さつきそこで翔鶴姉が襲われたの!」

「まったく日本の鎮守府の防衛網はどうなってるのよ! 何なのあの得体の知れない物

体は!」

「しれい! さつきそこで変なもん見つけたぜ!」

「佐渡さん、は、早いです……」ゼエーゼエー

パース、デ・ロイテル、瑞鶴、コロラド、佐渡、大鷹、選り取り見取りの艦娘達が物凄いい剣幕でのび太に迫ってきた。

とりよせバッグ②

「ちよ、ちよつとストップ！ みんな落ち着いて！ 一体何があつたの？」

各々が興奮状態であつたが、比較的冷静だつたパースから話を切り出す。

「まずは私から説明させて貰うわ。先程私とロイテルは向こうの廊下で夕立とすれ違つて——」

—
—
—

「ん？ ねえ、パース。あの娘つて確か、夕立ちちゃんだよね？」

「あらそうね、必死に走ってるけど何かから逃げてるのかしら？」

「つてなにあれ!? やっぱーい!!」

デ・ロイテルが指差す廊下の向こうには手首から先しかない『手』が宙を浮かびながら夕立を追い回していた。

「マスターハンド！ スマ○ラだよ、パース！」

「知らないわよ！ とにかく夕立を助けないと！」

「助けてっほしいいいいいいい！！！」

叫びながら夕立は二人のどこまで走っていくとそのまま抜き去り、二人が謎の『手』を迎撃しようとした。

が、しかし

「え？！」

モニユ

先程まで夕立を追いかけてた『手』は軌道を変え、パースの豊満な二つの山の片割れを掴んだのだ。

「きやあああああ！！！！ いやっ、やめっ、そ、そんなに強く揉んじゃ……／＼／＼」

「あわわわ、パースえっろっい／＼／＼」

少ししたら『手』はパースの胸から離れ、また夕立を追いかけ始めた。

「ていうことがあつてね！ 大変だったんだよ！ パースつたら『ああん！ 気持ちいい！ もつと強く！』とか喘いじゃって——グエツ!!」

途中から意気揚々と説明をして脚色を加えたロイテルにパースが肘鉄を喰らわす。

「誰も喘いでなんかいないわよ……／＼と、とにかくこのままあの破廉恥な物体を野放しには出来ないわ！」

「（そうか、あの時の柔らかい感触はパースだったのかあ／＼……ハッ!?!?!）」

手に残った余韻に浸って鼻の下を伸ばしていると後ろから叢雲と夕張のゴミを見るような視線をのび太は感じ取った。

「確かに許せないわねえ、そんなセクハラ野郎」

「ほんと、死ねばいいと思います」

「うぐつ!!!」

「admiral?」

「な、何でもないよ……それで瑞鶴は?」

「私は何とも無いんだけど、翔鶴姉がね……」

「ねえ、瑞鶴。向こうから走ってきてるのって夕立ちやんじやないかしら？」

「あ、ほんとだ。あんな全力疾走してどうしたんだろう？」

「まるで何かから逃げてるみたい……きやあ!? なにあれ!」

「うわっ!? 手だけのお化け!」

「ぼいぼいぼいぼい!!!」

二人の視線の先には、やはり追いかけられる夕立と宙に浮く『手』があつた。

そして戸惑う二人の間を夕立が抜き去り、撃墜しようと瑞鶴が矢を構えようとする。
が、

「と、とにかく艦爆隊——って間に合わない!」

「きやあ!!!」

「こつちに向かつてきた『手』と翔鶴がぶつかると……かと思いきや、二人が衝突するこ
となく『手』はそのまま通過して行ってしまった。

「翔鶴姉、大丈夫……!!???!」

「ってわあああああ!!」

「だ、大丈夫よ瑞鶴。!!どこもぶつかってないから怪我はして——」

「じゃなくて翔鶴姉! スカート! スカート!」

「え?」

翔鶴が下に目を向けるとあるはずの赤のスカートが無くなって白の紐パンが丸見えになっていた。言わずもがな先程の『手』が引つたくっていったのだ(もちろん途中で捨てた)。

「い……い……いやあああああああ!!!!!!
なんでいつも私ばかりいいいいいい!!!!!!」

「待って翔鶴姉! せめて下隠して!」

—————
—————
—————

「その後泣いてる翔鶴姉を部屋に連れて行ったり大変だったんだよ! 今度見つけたら爆撃してやるんだから!」

「そ、そうか、それは大変だったね……（すまない翔鶴……）」

「私なんてそんな生半可じゃなかったのよ!!」

「あ、ああ、次はコロラドだね……」

—
—
—

「Hi Atlanta. こんなところでどうしたの?」

「ああ、コロラド? ガンビア・ベイがまた迷子になっちゃって……次の演習で同じ部隊だから探してるところ」

「一番着任が新しいあなたに探させるなんて、ガンビアも手が焼けるわね。あつちから来る夕立にも聞いてみない?」

「げっ、nightmare……私、あいつ苦手だからパス」

「もう、いつまで苦手意識持つてんのよ。同じ艦隊の仲間なんだからもつと敬意をもつて——」

「アトランタ、助けてっばいいいいいい!!!」

「ちよつ！ こつち来んなよ！」

「アトランタ！ さつきから変な『手』が追いかけてくるっばい！」

「いや知らねえよ！ なんで私に助けを求めらんだよ！」

「つて、ちよつとあんた達！ 私を挟んで追いかけてこするんじゃないわよ！」

コロラドを中心にアトランタと夕立がグルグル回っていると、コロラドは胸の部分に違和感を感じた。

ギユッ

「え？」

夕立を追いかけてきた『手』が正面からコロラドの上着を引っ張り、それによって普段はギリギリ隠されてる大事な桃2つが思いっきり大衆の目に晒されているのだ。

「コロラド!？」

「いやあああああ!!! 何これ!? 何なのこれ!? 離しなさいよおお!!!」

『手』とコロラド、お互い本気で引っ張り合ってるせいで今にも千切れそうなほど服が伸びてしまい、余計に秘部が露わになってしまっている。

「いやあああ、アトランタ何とかして〜!!!」

「こ、コロラド、落ち着いて！ そんな暴れたら近寄れない……」

「他の子もいる公衆の面前で、ビッグセブンたる私にあんな……あんな醜態を晒させるなんて……!!」

「(やばい、想像しただけでちよつと鼻血が……)」

「admiral、今すぐ全艦娘であるセクハラハンドを探し出してギタギタのメタメタにするわよ!!」

「えっ!? ま、まあちよつと待ちなよ……ほら、佐渡達の話もまだ終わってないんだし……」

「ああ! 佐渡様と大鷹さんもその変な『手』を見たんだぜ!」

「大鷹さん! さつきほうじ茶ラテを貰ってきたから一緒に飲もうぜ!」

「まあ、ありがとうございませぬ佐渡さん。ほうじ茶ラテなんて間宮さんまた新しいメニューに挑戦されたんですね」

「いや、これ磯風さんが作った奴だけど？」

「ごめんなさい、佐渡さん。今日は胃の調子が悪いのを思い出したのでやっぱり遠慮します」

「ええ、そうなのか。マツが磯風さんから渡されたけど苦くて飲めないって涙目になってたから貰ったんだけど……ま、佐渡様が全部飲めばいいか！」

「ううっ……佐渡さんはほんとに姉妹思いなんですね」ウルツ

「いや、照れるなあ」

「じゃあ私と佐渡さんでちよつと飲んだ後残りは全て提督に差し入れしましょう」

「おーそれいい！ しれいもきつと喜ぶだろうな！」

「フフツ、それじゃあ早速執務室に……あら？ あっちから走って来てるのって夕立さん？」

「お？ 夕立さん鬼ごっこしてるのか？」

「た、助けて、つばい……」フラフラ

「ヒツ!! 夕立さんの後ろから『手』だけのものが迫って……!!」

「夕立さん危ない！ 伏せろ！」

夕立の方に向かって佐渡が手に持っていた飲み物入りの容器を全力で投げつける。

ほんとは夕立が回避してその背後にいる『手』にぶつけるのが佐渡の計算だったが、全力疾走を続けたことで体力が残されておらずとつきに反応しきれなかった夕立は、投げられたコップにおもいつき額をぶつけた。

「ブヘッ!!」

「あっ……」

だが、その衝撃でコップの蓋は外れ、中に入ってた液体は後ろにいた『手』にぶつかられた。

慌てた様な素振りを見せる『手』だったが、投球でひるんだ夕立の顔にすかさず掴みかかり、その口を手で塞いだ。

するとどうだろう、呼吸経路を一つ失ったことで酸素供給は全て鼻で行われるがその先には磯風特製ほうじ茶ラテを大量にかけられた『手』が待っており、夕立の肺には磯風ラテの香りが瞬く間に侵入していった。

「ボエエエエエエエエ!!」

その臭いに耐えきれなくなった夕立は泡を吹いて気絶してしまった。そして彼女が頭にかけていた眼鏡が取り外されると同時に煙をかき消すように『手』はふっと消えて無くなった。

「すげえだろ！ 佐渡様が磯風さんの作ったほうじ茶ラテでやつつけたんだぜ！」

「(夕立さん、あとで謝りに行きますね……しかし、今までの話と先程からこの部屋に漂う臭いからして行きつく答えは……)」

「あ、そういえばずっと気になってたんだけどなんでしれいの手はずぶ濡れなんだ？」

佐渡の一言にその場にいる全員が沈黙した。全てを察し汚物を見るような目で眼鏡の男を睨む者、顛顛に血管を浮かびあげる者、あまりの殺伐とした空気にこの場を去りたい者。反応は様々であったが、

最初に静寂を打ち破ったのは――

「あー！ しれいの手から磯風さんのラテの臭いがする！ もしかしてあの『手』の正体って!!」

今日のMVP、佐渡様であった。

「さあ、佐渡さん。私達はさつき廊下に巻いた飲み物の掃除に行きますよ。

今からこの部屋は血の雨で汚れますから……」

「うわーやだー！ しれいまた新しいオモチャで遊んでたんだなー！ 佐渡様にも使わせるー！」

「アハハハ、やつばく☆雰囲気だから私もこの辺で……」

大鷹、佐渡、ロイテルの三人が執務室から退室すると同時にのび太は行動に出た。

「もうしわけ——!!」

「「言い訳は聞きたくない」」

「ツ!?!」

土下座をしようとするのび太だったが、パース、瑞鶴、コロラドの三人は速攻で拒否し、己の得物を向けていた。

「admiral、覚悟は出来てるわよね？」

「提督さん、最後に言い残したいことはある？」

「絶対に……絶対に許さないんだから!!」

殺処分される豚を見るような目を向けられ、のび太も自らの人生に終わりを感じかけた。

その時——

「はあく、あんた達もうその辺にしときなさい」

「む、叢雲!？」

「ちよつと叢雲! その痴漢の肩持つ気!？」

「まあまあ瑞鶴も落ち着いてつて」

「夕張、貴女まで……」

「確かにあんた達の憤りは充分わかるわ。でも、こいつが理由も無しに、ただ自分の欲求を満たすためだけに艦娘に手をかける人間だと本気で思う?」

「そ、それは……」

「今回のことは私達や夕立ちちゃんにも多少なりとも原因があるし、提督だけが悪いわけじゃないから」

「こういう事がないようこいつにもきつちり言い聞かせるから、ここは私達に免じてどうか……」

「ううつ、叢雲……夕張……」

自分のために体を張って盾になり頭を下げようとする部下にのび太は感極まり涙が溢れそうになる。

と、その時であった。

「おーい提督、ちよつといいか？」

執務室のドアをノックしました一人入って来た。

「あら？ 木曾じゃない。ごめんなさい、今取り込んで」

「いや、多分俺もその話の当事者に入ってるから続けてくれて構わんぞ」

現れたのは艦隊の眼帯（右の方）こと球磨型軽巡洋艦（現在は重雷装巡洋艦）の木曾であった。

「え？ 木曾も提督の『手』の被害に？」

「いや、俺じゃないんだけどさ……」

そして木曾の後ろから、ゆっくり、ギギギと音を立て、扉が開くにつれ負のオーラが溢れ出て、部屋にいた全員を凍りつかせながら、もう一人が入ってきた。

「大井姉さんがスカート剥ぎ取られてさあ……」

「」「」

その名を聞いた瞬間、のび太と叢雲、夕張の目から光が消えた。

ハイライトオフの状態で戦艦ですら裸足で逃げ出すような負の念を纏いながら重雷装巡洋艦『大井』は部屋に入ると笑ってない笑顔で口を開けた。

「さっきそこで大鷹さん達とすれ違ってこの件の真相を聞いたんですけど、来てみれば、

叢雲ちゃん達にも責任があるとか、何とか……」

蛇に睨まれた蛙の如く、全身を撫で回すような冷たい声が三人を震え立たせる。

「それで……誰が悪いの?」

「この男が犯人です!!」

「ちよつと——!!??!」

間髪入れず二人の少女は眼鏡の男を指差した。

「ごめん、さすがに大井さんは怖いから無理……」

「今日の執務は私達で終わらせておくんで、安心してくださいね……」

「まあそのなんだ、提督……骨は拾ってやるよ」

「ま、待って、ぎゃあああああああああああ!!!!!!」

翌日、青葉新聞には『戦慄!! 艦娘に忍び寄る痴漢提督の魔の『手』!!』という見出しが載った。

ビッグライト①

「ビッグライト」

懐中電灯の形状をしており、照射した対象を巨大化する光線と巨大化させた対象を元に戻す解除光線を出せる。

建造、開発、修理、改修、廃棄、艀装や艦娘のあらゆるメンテナンスを行う施設、それがここ工廠である。

工作艦の明石と兵装実験軽巡の夕張が仕事場にしており、よく足を運んで来るのは提督と秘書艦の叢雲くらいで他の艦娘は改修の手伝いで呼び出された時くらいしか足を踏み入れない。

そんな鎮守府の工場に一人、ビッグセブンの戦艦『コロラド』がやって来た。

「……………」

工廠の前までは来たが、どこか心に迷いがあり中々入らずにただ入り口で佇んでいた。

「口く口ちゃん、やつぱり来たんだね」

「?!?!?!」

いきなり声を掛けられたので慌てて振り向くと、そこには艦隊の最高責任者である野比のび太提督がいた。

「そのチラシを持つてここに来たつてことは、実験に協力してくれるんだね?」

この鎮守府では夕張が修理したひみつ道具の実験をする際、所属してる艦娘には被験体になって貰うことがたまにある。勿論強制力はないので鎮守府の掲示板にビラを貼り実験内容と特別手当を載せて志願者が来るのを待つのだ。

ちなみにコロラドがずつと持ってたビラには『ビッグになりたいその貴方! 今すぐ巨大な体を手に入れよう!』と、怪しさ満点の広告が書いてあった。

「か、勘違いしないでよね! そこに落ちてたゴミを届けに来ただけよ! だいたい、この前大井に半殺しにされたくせに懲りずにまたこんなことして馬鹿じゃないの! どうせだから admirar が無様に醜態を晒すのを見学してあげるわ!」

「とか言つて、ほんとは身長を伸ばしたいんでしょう?」ヌツ

「ヒツ! ゆ、夕張、いつのまに!」

もはや恒例の我が夕張さんが、大事な被験者を逃さぬよう背後から忍び寄っていた。

「大丈夫、痛みとか全然無いかから、ちよつと眩しいだけだから、フッフ……」

「いやあ！あんた達のことなんか信用出来ない！ やつぱり帰る！」

先の『とりよせバッグ』の件もあり、実験欲に満ちた夕張の顔に狂気を感じて逃げ出そうとするコロラドだが

「ネルソンに勝てる!!」

「ッ!!」

のび太の一声でピタツと止まった。

「……………realiv? (マジ?)」

「ああ、大マジだ。実験で巨大化に成功すれば火力、耐久などの戦闘数値は全て倍になる。象が陸上生物の中で最も強いのも同じ理屈だよ」

「私がああネルソンより……………!!」

「ネルソンだけじゃない、長門陸奥はもちろん、アイオワや武蔵すら圧倒できるようになる」

「戦艦のNo. 1に、成れる……………!?!」

「そうだ！君はビッグセブンの要！最強の戦艦！ そんな君にしか頼めない！」

「コロラドさん強い！かっこいい！素敵！」

「そ、そこまで言うならしょうがないわねえ。この私があなた達に付き合っただけ

ことを光栄に思いなさい」

「(チヨロいわね、この戦艦)」

二人がコロラドの説得に成功したちようどその時、工廠に同じくピラを片手に持った三人の艦娘がやって来た。

「司令官！ ごきげんようです」

「なんや、どうせ誰も来とらんやろ思うとつたら意外と集まつとるやん」

「よう、提督。やっぱビッグになるならこの天龍様を置いて他にいねえよなあ」

そこに現れたのは駆逐艦『暁』、軽空母『龍驤』、軽巡洋艦『天龍』の三人だった。

「あー、君らもあのチラシを読んで集まったのかあ……」

「司令官！ ここに来れば大人のレディーになれるのよね!？」

「暁、今回の実験はあくまで『巨大化』だから大人に成長するわけじゃないんだよ」

「えっ……で、でも体が大きくなればエレファントに!!」

「エレガントね。それに暁、体の大きいビスマルクは一人前のレデイに見えるかい？」

—

—

—

『料理？ どうして私が？ 私は戦艦ビスマルクなのよ』

『午後3時よ、甘いものを食べたいわね。ねえ、聞いている？』

『もうクリスマスか、早いわね。さ、プレゼントを渡していいわよ』

「……………一人前のレディーは自分でなるわ」

「それでこそ暁だ、また一步レディーに近づいたね！ ご褒美に間宮券をあげよう」

「ほんと!? わーい司令官ありがとう！ 響達と一緒に間宮行ってくるね！」

「食べる前にちゃんと手を洗うんだぞー」

「あなた、ビスマルクに殴られても知らないわよ……………」

「図体だけのレディーはビスマルクだけで充分だから……………」

暁が工廠から去り、残ったのは2人。

「それで君、うちらは実験に参加してもええんやろ？」

「あ、龍驤、君の動機は……」

「動機なんて、そんな大したもんじゃないで。どうせこんなけつたいなピラ見て集まるモノ好きなんていないやろ思つて、君が哀れに感じたから暇つぶしに來ただけや。うちは別に——」

「バストは大きくならないよ」

「えっ……？ な、なんや、急に、うちは、べ、別にバストの話なんか……」

「残酷だけど後悔する前に言つておく。『巨大化』じゃバストは変わらない」

「なん……やて……?!? で、でも、僅かな膨らみでも倍になれば……」

「龍驤、紙に描いた絵を拡大しても立体にはならないでしょ？」

「……………ま、まあ、よく考えたらコロラドと天龍がいるんやからウチが居ても冷やかしになるだけやね……じゃあ、ほな」

「凄い哀愁が漂つてる背中ね……」

「龍驤、いつか胸を大きくできる道具を用意してあげるからね……」

龍驤がトボトボした足取りでその場を去り、残ったのは

「おい提督！ さっさとこの天龍様を巨大化しろよ！」

「最後は天龍、君か……」

「まあ元々世界水準軽く超えてるこの俺様には過剰かもしれないけど、そろそろ俺も軽

巡という狭いカテゴリーから抜け出す日が来たんじゃないかと——」

「見損なつたぞ、天龍!!」

「ヒヤツ!!? な、なんだよ急に……」

「そんな道具に頼るようになるほど、僕らの天龍は堕ちてしまったのか!」

「違うだろ! 僕らの知ってる天龍は限界にぶち当たってもいつも自分で殻を破つてた!」

あの時の君はもういなくなつてしまつたのかい!」

「提督……わりの、俺最近調子でなくてつい道具に頼ろうとしちまつた……でもそんなのじゃ駄目だよな!!」

ありがとな、提督のおかげで大事なことを思い出せた! 俺、行つてくる!!」

「うん! あ、この後鎮守府近海の哨戒あるから海防艦の引率頼んだよ」

「ねえ、あんなにやる気あるんだつたら天龍は追い返す必要なかつたんじゃない?」

「だつて失敗した時のこと考えたら龍田が怖いし」

「え? 失敗?」

「さあ、実験の準備は出来ましたよ!! 今すぐこちらへ!」

のび太が三人とやり取り取りしてる間に用意を済ませてた夕張がコロラドの腕を引つ張る。

「ちよつと待つて！失敗つてなに!? ねえ!!」

不安を抱えるコロラドは半ば強引に工廠の横に建てられたビニールシートの中に連れ込まれる。

「ねえ！ 失敗つて何!? 何が起こるの!?」

「いや大丈夫！ 体に異常は起きないから！」

「ただこの前の実験では誤つて空気中の微生物まで巨大化させちゃったから軽くモンスターパニックになっただけで今度は対策してあるから大丈夫よ！」

「全然安心できないわ！」

「だから戦艦の君を選んだんだよ！ コロラドなら全長1m程度のダニが出てきても軽く一捻り出来るでしょ？」

「うっ……まあ、それくらいなら」

「さすがコロちゃん、頼りになる！」

弱き者の味方！」

「フ、フン！ まあいざとなつたら私の主砲で薙ぎ払つてあげるわ」

「(こつちが心配になるほどチョロいなあ、この娘……)」

「それじゃあコロちゃんはそこに立つたまま置いて、提督はこれを」 スッ

「変わった形のライトね」

「見た目はね。こいつの光を今から君に浴びせるから眩しかったら目を瞑っていいよ」

「では、巨大化実験始めます！」

「いくよ、コロラド……」

ビッグライトーーーーー！！！！

「うあああああああ！！！！」

コロラドは眩い光に包まれた。

ビッグライト②

ビッグライトの実験から少し経過して、場所は移り変わり母港には南方海域への出撃要請を受けた武蔵、大和、ネルソン、アイオワ、瑞鶴の五人が待機していた。

「今回のサーモン海域北方主力艦隊の撃破は我々5人にコロラドを旗艦に加えた編成で出撃するそうだ」

「ほう、余ではなくコロラドが旗艦か。まあ偶には趣向を変えるのも一興か」

「ふふつ、コロラドさん久しぶりの旗艦で喜んでるんじゃないかしら」

「でも、空母は私だけじゃ制空権確保出来ないけど大丈夫なの？」

「no problem! コロラドの特殊砲撃と私達のpowerで蹴散らしてあげるわ」

「しかし、コロラドの奴遅いな。提督と夕張が連れてくると言っていたが」

「うわあ……あの二人のことだからこの前みたいにまた変な事件が起きそうな予感がするんだけど」

「あはは、あの時は瑞鶴さんも大変だったそうですね……」

「Oh look! コロラドが来たわよ! hey! hey! ……?」

遠方にはつきりと見えるコロラドに手を振るアイオワだったが、その姿にどこか違和感を覚えた。そしてこの時、それを感じ取ったのは彼女だけに留まらず他の4人もアイオワの指す方を見ると首を傾げた。

まるでトリックアートを見るような目の錯覚、遠近法が狂ったような整合性の無さ、そして満場一致でこの感想が出た。

なんか……でかくね?

「Hi! 待たせてごめんなさいね。USS BB-45 Colorado 到着したわ」ドシンドシンドシン
地響きを立てながら5人の元にやって来た艦娘は、身長4mを軽く超える巨大なコロラドだった。

「いやいやいやいや! おかしい! コロちゃん普通に登場しようとしたけど絶対おかしいから!」

「あー、ズイーカク気付いちやった? ちょっと背が伸びちやったのよね」

「ちよつとどころじゃないだろ……」

「まさか私と武蔵が他の艦娘を見上げる日が来るなんて……」

「フフフ、ネルソン！ もはや貴女の複縦陣の時代は終わりを迎えたわ！ これからは

私の梯形陣の時代よ！」

「ぬう……戦艦同士でしか砲撃させられないくせに生意気な……！」

「アイオワ！ 今ならバスケで貴女に負けないわよ！」

「Oh sit ! こんなフェアじゃないわ！」

各々が巨大コロラドの登場に動揺していると、そこに今回の黒幕二人が遅れてやって来た。

「やあやあみんな、新生コロラドの感想はどうだい？」

「提督……それと夕張。またお前達の仕業か」

「ほんと懲りないわね、今度は何したの？」

「このビッグライトっていう懐中電灯で物体を巨大化したのよ。今回はコロラドさんを3倍の大きさにしてみたわ」

「expandとは……my admiral はいつも奇怪な道具を持ってくるな」

「そういえばcafeteriaの掲示板に巨大化実験とかいう変なチラシが貼ってあったわね」

「コロちゃん、まさかそんな胡散臭い実験に……？ あんな酷い目にあつたのにチョロすぎでしょ……」

「う、五月蠅いわね！ ズイーカク！」

「しかし3倍ということは身長は約4.5 m程度か」

「あの、提督……まさかこの姿のままコロラドさんを私達とサーモン海域に出撃させるおつもりでしょうか？」

「勿論だよ、大和。実戦に役立てるための実験なんだから当然強豪揃いのサーモン海域北方で検証してもらいたい」

「待て admiral よ。コロラドは協力したようだが、余らは承諾した覚えはないぞ」

「全くだ、いくら提督といえど事前の知らせもせずこれは職権乱用に当たるのではないか？」

「そうよ！ こんなこととして大淀や叢雲だつて黙つてちゃ……」

あつ!? そういえば今日二人とも出張でいない日じゃん！

「なるほど、だから今日になって突然私達に出撃の命令が出たんですね」

「 admiral ほんとせこいわねえ」

各々が不満を漏らすのも無理はない。勝率で言えば五分五分、普段出撃してる海域の

中では難易度が最も高く、そんなところに不確定要素を連れたままの出撃など余計な損害に繋がる可能性がある。

だがこうなる事を予測してなかったのび太ではない。幼い頃から悪知恵だけは働くキレの良さで切り札を使ってきた。

「もし出撃1回で敵艦隊主力を無力化できた暁には実験に協力してくれたみんなに焼肉食べ放題をご馳走します!」

「なん……」「ですつて……!?!」

「あとラム酒も付けます!」

「ぬっ……!?!」

「あと寿司も!」

「Wow!」

その言葉を聞いた瞬間、戦艦達の目が獲物を捕らえる捕食者の目に変わった。

「任せとけ相棒! この武蔵が蹴散らしてやろう!」

「大和、推して参ります!」

「各々がその責務を果たせば、勝てるッ!」

「I love you , admiral ! 大好き♡」

「うおい!? 戦艦共!」

「それじゃあ、決まりみたいね。USS BB-45 Colorado class
name ship Colorado 出るわ！ ついて、きなさい！」

「ちよつと!?! あーもう、戦艦はほんと脳筋ばかり！ どうなつても知らないんだからあー！」

納得はいかないが戦艦だけで出撃する5人を放っておくことも出来ないので渋々ながらも瑞鶴も抜錨する。

「いつてらつしやーい」

「あとで感想聞かせてねー。」

「でも良かったんですか提督？」

「ん？ 何が？」

「あんな約束しましたけど、あの人達の食べる量考えたら一航戦の二人と同じくらいの食費が出ますよ？」

「フツフツフ、そこは大丈夫。サーモン海域北方で出る本来の出撃回数と修理でかかる資材を全て換金すれば経費は賄えるから」

「なるほど、いやあ大淀がいなくて良かったですね〜」

「そろそろコロラド達が戻ってくる頃かな」

通信機で敵主力艦隊の撃滅の一報を聞いたのび太はデータをもう一度計算し直したと言った夕張を工廠に残して先に母港に来ていた。

「Operation complete!」

「おー、みんな無事帰ってきた……」

「つておわあ!?! コロちゃんだけでそんなにボロボロなの!?!」

帰投した艦隊を出迎えると、ほぼ無傷に近い5人とは対称的にコロラドだけ大破状態となり装甲はほとんど剥がれていた。

「まあ、こんだけデカければ格好の的になるだろう」

「おかげで余らは被弾を抑えられたが、な」

「でもいくら被弾したところで big size になつたおかげか火力も上がつてから大破状態でも敵の戦艦を蹴散らせるわ」

「うーん、やつぱり大きくなつた分被弾は抑えられないか。でもコロちゃん一人の修理費を引き換えに大和型の二人や他の戦艦・空母が何度もボロボロになつて帰えつては出撃する出費を浮かせられるなら儲けもんかな。」

「ちよつと残酷だけど……」

「気にしなくていいわ admiral . むしろ私はもつともつとこの姿で出撃し

たいくらいよ！」

「あはは、まあこれからの方針を決めるのはまだ先としてとりあえずドッグで修理して来なよ。バケツは使つていいから」

「OK . 先に失礼するわ」

5人の随伴艦とのび太をあとにコロラドはドッグへと向かった。

そのタイミングを見計らつてか、武蔵がのび太の肩に寄りかかりながら話を切り出す。

「時に提督よ、あの約束は忘れてないだろうな？」

「はいはい、勿論ですよ。もうすでに間宮さん達に準備してもらつてるからみんなも先にお風呂に入つてから夕食にしまよ」

「Oh . やけに west side が眩しいと思つたらもうそんな時間だったわね」

「て、提督！ほんとに食べ放題なんですよね!？」

「ほんとだよ。大和がいつか思いつきり肉を食べたいつて言つてたから用意したのさ」

「や、やつと……あ！わ、私は別にそんながつつきたいわけじゃなくて、む、武蔵がお腹いっぱい食べれたらいいなつてですわね……」

「ヤマート、もう遅い、ぞ……」

ネルソンが温かい眼差しを向け、そんなやり取りをしているとのび太の足元にドッグの妖精さんがやって来た。

「あれ？ 妖精さんどうしたの？」

「テイトクサン、テイトクサン。シヨウニンヲオネガイシマス」

「あー、コロラドの修理の申請書を持って来てくれたのね」

修理、開発、建造などを手伝ってくれる妖精さんは基本的に提督の指示に従い提督の許可無しでは勝手に業務を行うことは出来ない。

「サインでいいかな。承認しましたよつと」

「ジュリシマシタ」

のび太が書類にサインするとそう言って妖精さんはトテトテという可愛い効果音が出そうな足取りでドッグの方に向かっていった。

「ところで提督さん、コロちゃんを修理ってどれくらいの資材使うの？」

ふと疑問に思った瑞鶴が何気なく質問する。

「そういうえば巨大化したコロラドは火力に留まらず間違い無く耐久も上がっていたな」

「私達大和型ですら戦艦の砲撃を4, 5発も受ければ中破以上は必至ですが、コロラドさんは砲撃、雷撃、空襲などさまざまな敵の猛攻をほぼ全て一人で受け、やっと大破に追い込まれました」

「そうだね、身長が3倍になったことで耐久も3倍になってるだろうからそれくらいは耐えられるんだろう。そして裏を返せば戦艦3隻分の修理費だけでこれだけの戦果を得られたのだから儲けもんだ」

「3倍？ うーん耐久が3倍になっただけであんなに耐えられるのかなあ……」

戦場に立ち現場を見た瑞鶴だからこそ抱く疑念。だがこの疑問が間違いではなかったことを裏付ける者が、まさに今、猛スピードで母港にダッシュしていた。

「て、て、て、提督うううううううう!!!!」

「おわっ!? って、夕張! どうひたのそんなに血相変えて走って来て……」

「こ、これ、これを見てください!」

「ん? コロちゃんの艦装の補給費用の書類?!? これがどうし……」

な、なんじゃこりやあああああああああ!!!」

と
艦装の補給、つまり使用した燃料と弾薬の費用がそこに記されていたがその数はなんと
「通常の、に、二十七倍?!?!?」

血の気が引くとはまさにこの事だろう、驚愕の数字に紙を握っていた指が震えていた。

「なんでこんな量の資材が……3倍の大きさにしたから補給だつて3倍の量で収まるじゃ……!?!」

「提督、体積比ですよ……」

「体積比……?」

「高さ・幅・奥行きのそれぞれが1mの立方体の体積は1?です。これを全て3倍にしたら高さだけなら3倍ですが体積は縦3m×横3m×奥3m \parallel 27?、つまり1?だった塊が27個になるんです……」

「そうか、ビッグライトを浴びたコロラドは身長が単に伸びたんじゃなく、巨大化したから体積そのものが倍になってるのか」

「最初の計算式に間違いがないか調べてたんですが、とんでもないミスを見落としてましたね……」

単純に見積もれば今のコロラドさんは戦艦27隻分つて……!!」

「こんなことが叢雲と大淀にもしよばれたら……う、お、おええええええ!!!」

「お、落ち着いてください! まだ大丈夫です! コロラドさんのビッグライトの効力が切れた後に補給をすれば、費用は通常値に戻ります! 修理費だつて馬鹿にならない筈ですからまだ入渠は……」

つてあれ? コロラドさんは?」

「さつきドッグに行かせちゃった……申請書にサインもして」
「この馬鹿ああああああ!!!」

コロラドの修理費用は金剛型改二より少し少ないとは言え、それでも戦艦27隻分の鉄と燃料を失うというのはどれほどの損失かは考えるまでもない。それを知って激昂する大淀と叢雲の恐ろしさも……

書類に書いてあつた修理費をよく確認しなかつた事を悔やんだが後悔先に立たず。既に鼻水を垂らして泣きじやくりそうになつてゐる眼鏡の男だが、彼の部下がさらに追い討ちをかける。

「では、余らも風呂に向かうとしよう」

「いい汗をかいた後は、やはり風呂だな！」

「その後はみんなで party ネ！」

「提督、や・く・そ・く。ちゃんと守ってくださいね」ニコ

「私、知らないって言ったよね？ それから私も協力したんだから焼肉には参加するわよ」

「待つて瑞鶴しゃん！ こんだけ資材使つて焼肉食べ放題とか無理！ 赤字出したら叢雲に殺されちゃうー！」

「瑞鶴様！ どうかお慈悲を！ お慈悲をー！」

「ちよつ、なんであたしだけ!? ていうか二人とも引っ付くな! 鼻水汚い!」

ビッグライト③

日は沈み、星々の煌めきが紺色に染まる闇を照らす夜空の真下で戦艦5人と空母1人が集まっていた。コロラドの背の高さの都合で屋内には入れないので風通しの良い広間で食事をする事になったのだ。

「えーというわけで、めでたく今月のサーモン海域北方の一発攻略が成功した記念に今回のMVPであるコロラドを祝して、この武蔵が乾杯の音頭をとらせて貰おう。

では皆、グラスを手を持って……乾杯！」

「「「かんぱーい！」」」

「プハ、このために生きてるってもんだなあ！」

「もう、武蔵。おじさん臭いからそういうのはやめなさいっていつも……」

「堅いこと言わずに大和ももつと食え食え。念願の肉の山だぞ」

「わ、私は別にそんながつつきたい訳じゃ……」

「ヤマトは要らんのか、ではこの肉が余が貰うことに」

「あ！ それは私が育てておいたお肉です！」 ヒョイパク

「ん、meatsもsushiもvery delicious だわ」

「あんた達、肉ばっか摂ってないで野菜も食べなさいよ！」

「ハムハムハムハムハム」

「つて、コロちゃん一人で食べ過ぎ！」

「だってズイーカク、大きくなった分カロリー消費も増えたんだから仕方ないでしょ」

「ところでその姿はいつまで続くんだ？ まさかずつとそのままというわけではあるまい」

「ユウバーリによると明日の朝には元の大きさに戻るらしいわ。」

でも私はずっとこのままでもいいくらいよ！ これ程のパワーがあればどんな姫級にだって負けないヒーローになれる！」

「確かに、コストは普段から出撃するような海域では過剰だが、大規模作戦の最深部では余やナガート達ですら足元にも及ばぬ戦果を期待できるだろう。今回の実戦でよく分かった」

「そうよ、そして私はこの鎮守府でNo. 1の座に就いてみせる。」

「そうしたら……」

「そうしたら？」

「もう2度と、駆逐艦や海防艦に『コロちゃん』なんて呼ばせない！」

「Ah……、
気にしてたのね、それ」

「私が戦艦の中で一番背が低いからってあの子達、私に対する敬意が足りないのよ……！」

特に清霜！ あの子未だに私を『戦艦になれた駆逐艦』だと思ひ込んでるし！」

「あー、そのなんだ……うちの清霜が色々済まんな」

「まあまあ、これから活躍していけばコロラドさんに対する評価も変わって行きますよ。さあ、そのためにもどんどん食べましょう」

そう言い、大和は景気良く山盛りの皿から肉をどんどん金網の上に敷き詰めていく。

「ありがとう、ヤマト！ じゃあこのソースとバラとカルビとタンとハラミを」

「だから一気に取りすぎだってば！ そんなにいつぺんに食べたら……」

以前から異国の地の『焼肉』という食文化に興味があつた（今は屋外で焼いているのでバーベキューとも言えなくはないが）コロラドにとつては火が通ることに溢れ出る濃厚な脂の匂い、タレと白米と肉の絶妙なハーモニーのせいで食欲を抑えられず瑞鶴の忠告も右から左に流してしまい、生焼け状態の肉だろうと頬張ってしまふほどだった。

そんなスピードで一気に大量の食料を胃に流し込めば当然……

「Ouch
!!!?!?!!」 お、お腹が……!!」

突如コロラドの腹部に強烈な痛みと便意が走った。

「言わんこつちやない。大丈夫か？ 明石を呼んでやろうか？」

「だ、大丈夫よ……わ、私はビッグセブンだもの……！　このくらいの腹痛……うつ？
うつ……うつ……」

で、でもちよつとお花を摘んでくるわ……」

腹部を抑えながらコロラドは席を立とうとしたが、直後に硬直した。

「どうした？　付き添って欲しいのか？」

「ねえ……私どこのトイレに行けばいいと思う……？」

最初はコロラドの質問の意味がよく分からなかった5人だが、彼女の身体を見て

「……あつ……」

察した。

|||||

その頃工場ではのび太と夕張が損失した資源の隠蔽をするために画策をしていた。

「やっぱりこれだけ減った資材を叢雲ちゃんと大淀が帰ってくるまでに回復させるには
明石に作らせてた例のアレを使うしかないんじゃないですか……？」

「バインバインか……あれだけは使いたくなくなかったけど、あの二人の雷が落ちるのは避けたいし、背に腹はかえられないな……」

自分達の失態を何とか誤魔化そうと裏工作を目論むみみっちい二人だったが、そこに腹を抑えながら内股でゆっくり進むコロラドがなんとか辿り着いた。

「あ、アドミラル……夕張……やっぱりここにいたのね……」

「コロラド？ どうしたの、生まれたての子鹿みたいな歩き方して」

「も、戻して……」

「え？」

「元の大きさに戻して！ 大きい方が出そうで我慢の限界なのお!!!」

強烈な便意に耐えていた少女は羞恥心を忘れ発狂寸前だった。!!!

「お、落ち着いて！ トイレなんて何処にでも……あつ」

そう、のび太達は見落としていた。体積そのものが倍加した彼女に普通のトイレは小さ過ぎるのだ。

「早く元の大きさに戻すか私用のトイレを作りなさいよ！」

「つて言われても、ビッグライトの解除光線はまだ出来上がってないし、幸いにも明日の朝までにはビッグライトの効き目も切れると思うから……」

「そんなに待てるわけないでしょ！ もういいわ……工場の中で漏出してやるんだから

!!

腹痛と肛門のふんばりに闘い続けた涙目の少女はもはや正常な判断が出来ないほどに精神崩壊を起こしかけている。

「コロちゃん落ち着いて!! 提督、どうすれば……!?!」

「そうだ夕張! どこでもホールが修理終わってたよね!?! あれとビッグライトを持つてくるんだ!」

「え? でもあんなの何に?」

「いいから早く!!」

訳を聞く時間も無かったので言われるがまま夕張は倉庫の奥にしまってたどこでもホールとビッグライトを引つ張り出して来た。

「よし、まずは……どこでもホール!」

と言つて取り出したのはハッチの付いた円盤型のマンホール。のび太はそれを工廠前の広い地面に置く。

「この蓋に付いたダイヤルを回して開けるとマンホールはダイヤルが指定した地底や洞窟に繋がるんだ。と言つてもまだ完全には直つてないからダイヤルを回しても毎回ラウンドになるけど……」

説明しながらハッチを開けると薄暗い穴から風が吹き抜けており、確かに鎮守府に穴

を開けたのではなく、暗黒の空間がずっと先まで続くどこか広い地下世界に直接繋がっているのが分かる。

「続いてこれを……ビッグライトロー……!!」

次にコロラドを巨大化した時と同様に先程のマンホールにビッグライトの光線を浴びせ、どこでもホールの穴を広くしていった。

「よし、こんなもんか」

満足げに作業を終えると、のび太はおもむろに穴を指差しコロラドの方を向いて

「さあ、コロラド。トイレが完成したよ」

「……………what's?」

コロラドの思考が一瞬停止した。

「あ、アドミラル……私貴方が何言ってるのか理解出来ない……」

「大丈夫、和式トイレと変わりないし、これだけ深い穴なら溜まることは無いと思う。多分……」

「こんな公衆の面前で、あんたって人はどこまでも……!! うっ!!」ギュルルルル

「だって工廠が使い物にならなくなると困るし……」

「ほら、コロちゃん!漏らしたらビッグセブンの名が廃るわよ!他に選択肢がないんだから早く!」

これぞ鬼畜所業である。これが婦女子にさせる行いだらうか？

しかしもう肛門括約筋が限界を迎え、夕張の言うとおりの猶予は無かった。

「いつて……………」

「え？」

「早くどっか行って——————」

!!!!!!

|||||

「うぐっ……………えぐっ……………」

公衆の面前で排便を強いられあまりの羞恥の念に押しつぶされ泣き囁る巨大な少女。そこにもはやビッググセブンの威厳は微塵も無かった。

そんな珍事件の救援に呼ばれ大量のトイレットペーパーを輸送しにやって来たロングな金髪に葵色の瞳を持つ米国駆逐艦——フレッチャーはコロラドをあやしていた。

「もう泣かないでコロラドさん。さあ、一緒に寮に戻りましょう？」

「やだ、帰りたくない……………どうせみんなに笑われる……………こんな場所で野○ソして……………私

なんて、どうせビッグセブンの恥さらしよ……」

「そんなこと言わないで、恥じる事なんて何も無いのですよ。あなたはただ一生懸命自分を高めようと頑張ってたただけなもの。私はあなたのそんな直向きな精神を尊敬していますよ」

「うわあああああん!!! フレッシュチャー……!!!」

さすがマザー・フレッシュチャーと呼ばれるだけのことはあり、コロラドは一部分を除いて幼いその身体に泣きつきフレッシュチャーの包容力をその身をもって体感した。

「あらあら仕方ないですね。それじゃあ、今だけはビッグセブンであることを忘れていいので、このフレッシュチャーの胸で思う存分泣いて下さい」

その胸はまさに聖母と呼ばれるに相応しいものであった。

「いやあ、すまないねえフレッシュチャー。急に呼び出しておいてこんなことを頼んでしまつて」

「構いませんよ、提督。このフレッシュチャーが役立てることなら何でもお申し付け下さい」「さすがフレッシュチャーママって呼ばれることだけのことはあるわよねえ。他の子だったらキれるかもしれない案件なのに文句一つ無くこなしてくれるんだから」「フフツ、もう夕張さんつたら。でも二つ間違いがありますよ。」

まず、仲間が非常事態に陥つたら艦娘はみんな必ず助けに来ます」

「ああ、なんていい子なんだ。僕のママにもフレッチャーママの優しさを分けてあげたいくらいだ」

しかしのび太は今日この日、思い出すこととなる。

ママを怒らせてはいけないことを……

「それともう一つ……」

誰も怒ってないとは言ってませんよ?」

「えっ?」

ガサガサガサガサガサガサガサガサ

フレッチャーの目からハイライトが消えると同時に、暗闇の中から工場に向かって複数の影が急接近して来た。

「なにになになに!?!」

「同胞が……友人の女の子がこれほどの辱めを受けていながら、怒らないわけがないじゃないですか」

「ふ、フレッチャーさん……?」

「ですが、今回はコロラドさん自身も承諾した上での事故ということなので、私の方からとやかに言う気はありません。だから……」

遠征組の皆さんに全てお話ししておきました」

「遠征組って、まさか!」

のび太の顔が引きつると同時に茂みから四つの影が飛びついて来た。

「およよ? およよ? 睦月達と神風ちゃん達が集めた資源を無駄使いしたのは、どこ
のどいつにやしい?」

「睦月!」

「仕方ない子ねえ……今、如月が楽にしてあげる」

「如月!」

「へへへ、これから殺される養豚場の豚みたいな目をして、可愛いねツ!!」

「臯月!」

「ねえ、こいつ殺っちゃっていい?」

「文月!」

大発を搭載できる睦月型改二シスターズである。

しかしその瞳には皆が知る無垢な幼な子の輝きはなく、自分達が遠征で集めた蓄えを食い潰した愚か者への殺意に満ち溢れていた。

「制裁は彼女達に任せますので、私とコロラドさんはこれで！」
「待つて！ これには深い訳が！ ああ、うあああああ!!!」

4人一齐にのび太に襲い掛かり、そのあまりにも無残な現場から夕張は今すぐにも立ち去りたかった。

「わ、私は急用を思い出したので先に失礼しま……」

「あら、一人だけ逃げようなんてダメよ夕張ちゃん」

「た、龍田!?!」

突如夕張の背後から現れたのは遠征組の副リーダー——天龍型軽巡洋艦の『龍田』であつた。

「私達が寝る間も惜しんで溜めた燃料と鋼材を湯水の如く溶かしてくれちゃつて……死にたいの?」

「お願い龍田! 私もこんなことになるなんて思わなくて……何でも言うこと聞くから命だけは!」

「ふくん……だつて鬼怒ちゃん。このメロンどうしようかしら?」

「き、鬼怒!？」

龍田の方を見るとさらに後ろから、ゆらゆらと身体を揺らしながら、一步、また一步と、ゆっくりこちらに近付いてくる影がある。

「おにおおおおおおおおお……………」

遠征組の首領——長良型軽巡洋艦の『鬼怒』だった。

「おにおおおおおお……………」

普段はムードメーカー的な存在でおちやらけてる彼女だが、あまりのシヨックからか今は眼の焦点が合っておらず、訳のわからない言動をただ繰り返してるだけであった。

しかしその身に纏ってるオーラはその名に恥じぬまさに怒り狂う鬼そのものだ。

「ね、ねえ鬼怒……話せば分かるから、私達仲間だよね……う？」

その時、鬼怒の中で何かが切れた。

「おにおおおおおおおお……………」

「いやああああああ……………」

!!!



翌朝、食堂にて

「以上が昨日起きた『ビッグライト事件』の全容です。叢雲さん」

「そう、私と大淀がいない間随分苦勞をかけたわね。フレッチャー」

「いいえ、普段から提督の相手をされてる叢雲さん達に比べたら私なんて」

昨日の事件の当事者であるコロラドとフレッチャー、そして嫌な予感がすると出張先の仕事を早めに終わらせ朝一で帰って来た叢雲と大淀が4人用のテーブルで朝食を取りながら事後報告をしていた。

「それで、あの馬鹿二人はどうなったの？」

「はい、提督の方は睦月型の皆さんに脚をロープで括られて海上引き回しの刑に処されたようです」

「西部劇で馬に引きずられる奴を海でやったのね……」

「でも、結構激しかったようで今朝提督の顔を見たら殴られたような痣が出来ました……ちよつと心配ですね」

「それくらいのことしたんだから自業自得よ。それで夕張の方は？」

「夕張さんは龍田さんと鬼怒さんに連れられて遠征に駆り出されています。東京急行50周終わるまでは帰さないと言っていたので1週間程は戻ってこれないかと」

「これで少しは鎮守府も平和になるわね」

「コロラドさんもこれに懲りたら安易に提督や夕張さんの口車に乗せられては駄目ですよ」

「ええ、オオヨド……何事も身の丈から外れたことをしようとするとは確な結果を生まないことを実感したわ……」

「だいぶやつれてるじゃない。心中察するけどさつさと切り替えた方がいいわよ」

「だって、アオバがこの事を記事にしないわけじゃないじゃない！　そしてあんな恥ずかしいところを鎮守府のみんなに見られるんだわ……！」

「ああなるほど、それだったら心配いりませんよ。ほら、今日の青葉新聞です」

「いやあ！　そんなもの見せないでええええええ！！！」

大淀が持つて来た青葉新聞を見せようとするが、すぐさまコロラドは席を立ちその場を離れていった。

「あーあ、朝餉くらいしつかり摂りなさいよ……それにしても」

叢雲がテーブルに置かれた青葉新聞に目をやるとトップの見出しにはコロラドの一件とは全く関係の無い記事が載っており、そこに書かれていたのは……

『驚愕！ 鎮守府に恐竜現る!?!』

という文面と共にオルニトミムスのどアップ写真が貼られていた。
「恐竜ねえ……」

叢雲は新聞を見ながら淹れたてのコーヒーに手を伸ばすのだった。

わすれろ草

くわすれろ草く

花と茎があり、この道具の花の部分のにおいを嗅いだ場合、嗅いだときに考えたり思っていたりしたことを一時的に忘れてしまう。

どうもどうも青葉ですく。

旧式重巡洋艦青葉型のその一番艦、ジャーナリズムを志すちよつとお茶目な女の子です。

いやあ、毎度好評の青葉新聞ですがネタの提供元となっている司令官には感謝感激嵐！

毎日夕張さん達と変な道具を使って実験をする度に惨事を起こしてはスキャンダルに繋がるのでほんと飽きませんよねえ。

しかし今日は少し記事にしづらいです。なんてたつて……

つてうわあ、ずぶ濡れになった上着とズボンを部屋干ししてパンツ一丁で机に向かつてるよこの人……。

『ブエックシヨイ！……ぶるる、やつぱこの時季にパンイチはキツイなあ。でもこの書類を明日までに片付けないとまた叢雲にどやされるし、眠気覚ましには丁度いいか』
それで風邪引いたらどうするんですか、全くこの人は……

私が……もとい艦隊のみんなが心配するでしょうに。

にしても服を着てると分からないですけど見かけによらず結構いい身体してますねこの人。

《半裸で執務室に蠢く変態司令官》

つてタイトルの記事を書こうかと思いましたが、このショットはみんなの目には毒なので青葉の秘蔵写真としてしまっておきましょう。

他にもっとスキヤンダラスな絵面は……

『ガタガタ……ガタガタ……』

えっ、何？ 窓を叩く音？ カメラの死角になつてるけど、外に誰かいるんですか？

そこ三階ですよ。

『のび……君……久し……だね』

よく聞き取れないけど司令官の声じゃない……！ やつぱり執務室の外に誰かいる

んだ……まさか敵!?

『き、君は……バンホーじゃないか!』

司令官の知り合い? とにかくもつとカメラを寄せて――

――
ブツン
――

突然カメラの映像が途切れた!?

「ちよつと!? 肝心なところでなんで切れるんですか! もう、高いお金出してメンテも月一でやってるって言うのにく!!」

司令官! 司令官は大丈夫なの!? 盗聴器は生きてるけど部屋の中は今どうなって

……

『いや、久しぶりだね。子供の時以来か。懐かしいなあ』

どうやら切羽詰まった雰囲気ではないですね……司令官の昔馴染みたいです。『なんでパンツ一枚なのかって? それはきかないでくれ……』

にしてもどうして急に僕のところへ?

え? どこでもホールを登って来たらここに?

へ、へえ……あの穴、バンホーの私有地に繋がってたんだあ……

つまりコロラドのあれが全部君の庭に……

え!! 最悪国際問題!! ま、待ってくれ! 悪気は無かったんだ!

え? 今回は僕らの友情に免じて? そうだよねえ、僕と君の仲だもの……

え? 代わりに一発殴らせろって……まあ、うん。今回はこっちに非があるんだし、それで済むなら越したことはないよね……

じゃあ心の準備が出来るまでお茶でも……待って! せめてピンタにして——
痛ったああああああ!!!」

あ、今殴られましたね! でも命のやり取りをしてるわけではなさそうです。

『痛たた……とりあえずこれでチャラってことだね……』

じゃあ改めて、久しぶりだねバンホー。ローは元気にしてる? せっかく来たんだし君の身の周りや故郷の話聞かせてよ。

あつ、ちよつと待ってね——ブツン」

あ、あれ? 何も聞こえなくなつた。盗聴器まで故障なんてこんな偶然……

「まさか司令官が切つた……!?!」

そうですね、普段は故障することなんてまず無いのにこんな都合よくしかもカメラとマイクの両方が壊れるなんて有り得ない!

だとしたら答えは司令官がとづくにその存在に気づいてて電源を切つたとしか考え

られません。

「司令官いつから気づいて……いえ、それよりも重要なのは、司令官がそこまでするなんて何故？」

いつも青葉にスクープとか撮られ放題で隙だらけのくせに今回に限って何故？

この前なんてうちの鎮守府に視察に来た大将が司令官に『金をやるから慰みモノに使える艦娘をいくつか寄越せ』なんて迫ってきたら、執務室でその大将をボコボコにしたスキャンダルがありましたけど、その時すらカメラや盗聴器は全くいじらなかつたのに……

まあ、その大将は後で青葉が脅しをかけて口封じしておいたので外部に漏らすことはないでしょうけど。

つまり、それ以上にもっと……絶対に知られたくない密会。

と、なれば青葉の取る行動はたった一つ……

「ヒヤッハハー……!!! 特大スクープが目の前ですぜえ!!!」

こんな特ダネ私のジャーナリズムが放っておける訳ないじゃないですか！

一見又ケサクだけど、謎に包まれた所がある司令官の秘密を握るチャンスでもありま

す。

ここからなら執務室までそう遠くない。急げばまだ間に合う——

『グルル……………』

「!?」

なに……………? 今窓の方から唸り声が……

何か大きな動物がいるような気配がする……

怖いけど、カーテンを開けて確かめないと……。

「ヒイツ!」

『ガヴ!』

ここ、これは!?

爬虫類のような質感の肌、長い尻尾と屈強な後ろ脚の二足歩行、凶鑑でしか見ること
は出来ないすでに地球上から絶滅したと言われている太古の生物——恐竜!?

「あ、あ……」カシャ

悲鳴を上げたり何故ここに恐竜がという思考が働くより先に、シャツターを切つてい
たのはさすが青葉と自画自讃すべきところでしょうか。

『!! グエエー——!!』

フラッシュに驚いたのか、恐竜——確かあれはオルニトミムスという種だったでしょ

うか、雄叫びを上げてどっか行っちゃいました。

「ふああ……ビックリしたあ……」

こんな急展開誰が予想できますか。一体あの恐竜は何だったのでしょうか。

「まさか、あれも司令官が!？」

ありえない話では無いです。とにかく今は執務室に向かわなければ。

|||||

「司令官！ 洗いざらいキツチリ話して貰いますよ！」バン

「キヤーツ！ 青葉さんのエツチ！」

「エツチって、自分からパンイチになったんでしようが!!」

「もう、ノックくらいしてよ。着替える時間も無いじゃないか」

「そんなことより司令官、ここで……話してた人がいなくなってますね」

「人？ この部屋には僕一人しかいなかったよ」

「誤魔化そうとしても無駄です。それにこの恐竜は何なんですか!？」

「へえ、よく出来た合成写真だね。本物そっくりだ」

「……なるほど、あくまでシラを切るおつもりですか。では、こちらにも考えがありま

す

「??」

「今ここで大声で人を呼びます」

「えっ!? ちょっと待って! それは……!」

「部屋にほぼ全裸の男と艦娘一人……何も起きないはずもなくというのが普通の思考。ここで私が誰かに助けを求めれば、司令官の信用は地の底に落ちます。」

最も忠誠を誓ってる朝潮ちゃんも七夕の短冊の裏に『大きくなったら司令官のお嫁さんになりたい』と密かに書いてた択捉ちゃんも、汚物を見るような軽蔑の眼差しをあなたに向けてしようねえ」

「や、やめてくれー!!! あの子達は僕に残されたオアシスなんだー!!!」

「じゃあ話して貰いましょう! 先程までここにいた人物は誰なのか! その人のこと全てを!」

「……………分かったよ、青葉。」

まだ時期が早いと思つてたけど、仕方ない」

機の引き出しから何か……え? 引き出しの板の下にさらにスペースが?

青葉それ知りませんでした。

そして司令官が取り出したのは……花?

「何ですか、その花？」

「この花には真実が隠されてる、持ってごらん」

「うーん、ただの花みたいですが……ちよつと良い香りがするだけの。」

それより司令官が直接話せばいいじゃないですか！」

「何のことについてだっけ？」

「何のつて、そんなの勿論……あれ？ 何でしたっけ？」

「その写真の恐竜のことじゃないかな？」

「恐竜……？ そう！ 恐竜、恐竜がいたんですよ！」

あれ？ 恐竜だけだっけ……」

「悪いけど僕は知らないなあ。もしかしたら夕張がまた何か道具の実験をしたのかも」
「そう……ですか」

なんでしょう、この頭の中のパズルから大事なピースを失ったような感覚は……。確かに部屋の窓から恐竜を見たんです。

でも、もつと重大な何かを掴んだような……

「……まあいいです。もう遅いし眠くなって来たので青葉は戻ります」

「そうだね、お休み」

「お休みなさい司令官。ていうか、服来てくださいよ！ 古鷹呼びますよ！」

「お願い！ それだけは止めて！」

全くあの人は、風邪を引いたらどうするんですか……あ、でも結構良い身体してたし
写真に撮っておけば良かったなあ



「ごめんね、青葉……まだ、君らに知られる訳にはいかないんだ」